
メイクアップアーティスト

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイクアップアーティスト

【Nコード】

N5416N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

地味な主婦。ところがそのパートで大変身。そのパートとは。夫婦の間の恋愛ものです。

第一章

スト

メイクアップアーティスト

彼の妻は平凡な顔をしている。はつきり言えば美人ではない。しかし不細工でもない。本当に平凡な顔だ。

それで彼、中森一郎もこれといって思うことはない。家事は万全にするし料理も人並みよりは少しばかり上である。とりわけ魚料理が得意だ。

パートでお金も稼ぐししかも浮気もしない。だが実はそのパートが何なのかを知らなかったりする。

「なあ奈緒ちゃんさ」

妻の名前を呼んで尋ねる。家ではこう呼んでいるのだ。仲もいいのだ。

「一体何のパートしてるの？」

「秘密って言ったら怒る？」

「怒るっていうか怪しいからね」

こうその平凡な顔の妻に返す。長い髪を後ろで束ねているその顔は本当に平凡なものだ。こう言ってしまうえば何だが何処にでもあるような顔である。

「探偵雇うかもね」

「マイク」ハマーでも雇うの？」

「あんな物騒な探偵日本にいるものか」

こうその眼鏡をかけて七三分けにしている顔で返す。彼にしてもその容姿は極めて平凡なものである。そういう意味では似合いの二人ではある。

「しよっちゆう銃をぶっ放すしさ」

「それじゃあカート」キャノン？」

「随分個性的だね」
「酔いどれのホームレスの探偵だ。かなり異色ではある。」
「その名前は」
「まあそうだけれどね」
「とにかくそこまで考えてないから」
「そうなの」
「そのパートの仕事が何かを聞きたいんだけどさ」
「またそれを問うのだった。」
「それで何かな、それって」
「じゃあ言うわ」
「返答は素っ気無いものだった。」
「私のパートはね」
「うん、何？スーパールのレジ？本屋さん？」
「メイクアップアーティストよ」
「いきなり横文字だった。」
「それよ」
「メイクアップアーティスト？」
「舌嚙まない？」
「噛みそうだよ」
「実際そうだと返す一郎だった。」
「何、それ」
「何、それじゃないけれど」
「妻の告白を聞いてだ。啞然となっていた。」
「あのさ、だから何それ」
「いや、私もちよっと友達の見介ではじめたんだけどね」
「お友達の？」
「そうなの。これが実際にやってみるとね」
「奈緒は明るい顔でにこにこ話すのだった。」
「物凄くいいのよ」
「楽しいとか？」

「もう顔が全然変わるのよ」

「それは聞いたことあるけれど」

「見たい？」

その笑顔で夫に対して言ってみせてきた。

「それでそのメイクアップ。実際にその目で」

「実際について今できるの」

「そうよ、もう道具は揃ってるし」

言いながらであった。夫を洗面所、鏡のあるその場所に案内してそのうえで何故か後ろからバイオリンケースを出して来た。奈緒の身体より少し小さい位の巨大なケースである。

「ここにね」

「バイオリンケースに入ってるのか？」

「そうよ、化粧品も道具も全部ね」

「何時の間にそんなのが家に」

「だから。パートをはじめてからよ」

「それでこんなものを」

「そう。それでね」

奈緒の言葉は続く。完全に彼女のペースになっている。

第二章

「全部貰ったのよ」

「買ったんじゃないんだ」

「気前のいい会社だからね。それでね」

「うん、それで」

「今から見せてあげるけれど。私のメイクアップ」

「こつ夫に対して言うのである。」

「よかつたらどうかしら」

「見せるって奈緒ちゃんがメイクアップするのかい？」

「私もね。それで一郎君もね」

彼もだというのだ。彼女は自分の夫を君付けして呼んでいるのである。

「そうしてあげるけれど」

「僕がメイクアップって」

「最近じゃ男の人もお化粧するじゃない」

「まあね。そういえばそうだけれどね」

「だつたらよ。いいわよね」

「いいわよねって。時間かかるんじゃない」

「ああ、それは大丈夫よ」

また笑って言う妻であった。

「それはね」

「大丈夫って？」

「私のメイクは時間がかからないのよ」
「だからだというのだ。」

「だからね。大丈夫よ」

「時間がかからないって」

「一瞬で終わるから」

「こつまで言うのだった。」

「一瞬でね。いいわね」

「一瞬って」

「今からするから。それじゃあね」

そのバイオリンケースを床に置いてそのうえで開いてだ。早速はじめるのだった。

まずは夫にだ。立ったままの彼にそのままはじめた。まさに一瞬だった。

それが終わるとだ。こう言ってきたのだ。

「はい、これ」

「ああ、鏡か」

「そう、見て」

手鏡だった。それを出してきたのである。

「これでね。よく見て」

「ってこれが僕!？」

そこにいたのは目も唇もはつきりとして眉の形もいい美男子だった。眼鏡は外され神はオールバックになってだ。顔の色も白く奇麗なものになっている。

鏡に映るその顔を見てだ。啞然となっていた。

「全然別人じゃない」

「そうでしょ、別人でしょ」

くすりと笑って言ってみせる妻だった。

「奇麗でしょ、本当に」

「奇麗っていうか本当に」

「別人って言うのこれで二回目よ」

「じゃあ違う僕がいる」

こう言い換えた。咄嗟にだ。

「鏡にね。これでいいかな」

「いいわよ、それで」

妻もそれでいいと返すのだった。

「それだけねど」

「次は奈緒ちゃんだよね」

「そうよ、私よ」

笑顔で応える奈緒だった。そうしてだ。すぐに自分の鏡に向かいだ。化粧をはじめた。それも一瞬だった。そしてそこにいたのはだ。別人だった。

どの女優にも勝てるようなだ。その美女がそこにいた。自分の妻には見えなかった。

「おい、誰だよ」

「だから奈緒よ」

笑って返す彼女だった。

「見てわからないかしら」

「別人にしか見えないよ」

啞然とした顔で返す一郎だった。

「本当にな。誰なんだよ」

「そこまで変わってるの？」

「ああ、別人だよ」

啞然とした言葉はそのままだった。

「本当にな。誰なんだよ」

「凄いでしょ、このメイクアップ」

「凄いななんてものじゃないよ。僕だってさ」

「そういうことよ。いいでしょ」

満面の笑顔で言う奈緒だった。

第三章

「人間ってメイクでこんなに変わるのよ」

「そうなんだ。話には聞いていたけれど」

「そうよ。それでね」

「うん、それで」

「他の人のメイクアップなら何時でも誰でもさせてもらうわ」

急に話が変わってきた。奈緒の言葉が思わせぶりなものになる。

「ただね」

「ただ？」

「私自身にするのは一郎君の前でだけよ」

「僕の前だけなんだ」

「じゃあこの顔で外に出たらどうなるかしら」

思わせぶりの言葉をそのまま出すのだった。

「その場合はね」

「そんなこと。もう」

言うまでもなかった。何しろ人はまず顔を見る。それを考えればである。まさに火を見るより明らかである。一郎は内心本気でそのことを危惧していた。

「それこそ」

「そうよね。そういうことよね」

「絶対に止めてくれよ」

本気の言葉である。

「そういうことはさ」

「わかってるわ。だから自分にメイクアップする時はね」

「うん」

「一郎君の前だけよ」

じっと彼を見ての言葉である。

「絶対にね。他の人の前ではメイクアップしないから」

「そうしてくれるんだ」

「その代わり。一郎君もね」

彼への言葉だった。

「わかるわよね。私の前でだけよ」

「メイクアップできるのは奈緒ちゃんだけでも？」

「そうよ、私だけのものだから」

自分の愛する人だからなのだという。これ以上はないまでに率直な意思表示だった。

「だからね。それはね」

「奈緒ちゃんの前でだけなんだね」

「そうよ、絶対よ」

それを言うのだった。

「本当にね」

「わかったよ。じゃあメイクアップはお互いの前だけでだね」

「そうよ、お互いの前だけよ」

「うん」

奈緒のその言葉に頷いたのだった。

「僕も。こつした顔は奈緒ちゃんにしか見せたくはないからね」

「それじゃあ。いいわね」

「二人だけの秘密だね」

一郎がこつ言うのであった。奈緒の返した言葉は。

「夫婦の秘密よ」

「そうだね」

こつ話してであった。二人はそのまま手に手を取り合って寝室に消える。夫婦の密かな楽しみができた瞬間であった。

メイクアップアーティスト

完

2
0
1
0
·
5
·
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5416n/>

メイクアップアーティスト

2010年10月8日14時02分発行